



谷茶のウシデーク

谷茶

『恩納村誌』には「臼太鼓は1886(明治19)年、谷茶の大半の家を焼き尽した大火後、中絶していたが、その年に生れた当山正堅(後の恩納村長)の努力によって1929(昭和4)年に復活したのである。幸にもシードヌ屋の媼(老女)が居られたので、教示を受けることができた。他のムラとは異なって旧暦7月15日に行われ、男の盆祭り(エイサー)もその日に行われる。戦争中は何処の町村でも同様、中止されていたのであるが、戦後になって再び始められるようになった」とあります。

日本の考古学者である濱田耕作(後の京都帝国大学総長)は『沖縄の旅』という手記で、島袋源一郎(大正・昭和期の沖縄研究者)に案内され、谷茶のウシデークを見学したことを記しています。その内容から1930年代初期に来沖されたと考えられますが「親切純朴な恩納の人々の厚意を永久に心に銘じて忘るゝ事ができない」と記しています。

現在でも谷茶では旧暦7月15日にウシデークとエイサーの本番、旧暦7月18日は別れの演舞が行われます。

富着

『恩納村誌』によると「旧8月15日、紺着、白鉢巻前結び、四つ竹、扇の舞を戦前まで御嶽の傍にあったアガリ屋(ムラの最旧家)で踊った。この家には富着アンサリの霊が祀られ、その霊にウチャナク、花木を捧げ、線香が七本とぼし終るまで踊った」とあります。村史民俗編調査票によると、近年では「老人会、婦人会を中心とした区行事となっており、当日は午後3時頃から古島の殿内前、午後7時30分頃から観月会を兼ね、

公民館広場での演舞が行われている。婦人会、老人会が20名前後演舞しているが、特に年齢制限はない」とあります。

仲泊

1999年、譜久村照代による音取(ニードウイ)を務めていた山城はまだ(明治36年生まれ)への聞き取り調査記録によると「もともと12曲あったが、山城タルーさんがニードウイの時「いじゆの木」を外して11曲になった」とあります。『恩納村誌』では「中断していたのを昭和6年に寝たきりの里主屋の媼さんから教わった」とあり、それが前出の山城タルーたちでした。

仲泊のウシデークは例年、旧暦9月9日に行われますが、「女あしび」がある年はウシデークは3日間行われ、豊年祭のある年は行われません。旧暦9月15日のカーウガンでは、婦人会がウシデークの終了報告(祈願解き:ウガンブトウチ)もあわせて行っています。(町田)

【参考文献】

- ・『恩納村誌』 仲松弥秀 1980年
- ・『いやしりの里 名嘉真』 名嘉真字誌編集委員会 2012年
- ・平良徹也「ウシデーク」と「三月遊び」から考える祭祀芸能形式の展開論
- ・『奄美沖縄 民間芸芸学』 第13号 2014年9月
- ・『恩納字誌』 字恩納自治会 2007年
- ・小林公江・小林幸男「沖縄本島北部の臼太鼓」京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要 2014年
- ・『沖縄大百科事典(上)』 沖縄タイムス社 1983年
- ・沖縄タイムス 1977年4月17日朝刊
- ・恩納村博物館開館準備調査メモ(譜久村照代・比嘉めぐみ) 1999年
- ・恩納村史民俗編調査票(富着自治会) 2015年
- ・濱田耕作「沖縄の旅」『現代紀行文學全集 第五卷 南日本篇』 修道社 1958年